

三重県無形民俗文化財 円座の羯鼓踊(かんこおどり)

2024年第2版(改訂増補)

1 羯鼓踊(かんこおどり)



①円座の羯鼓踊

円座町は三重県伊勢市の西南部にあり、すぐそばに清流で知られている宮川(1級河川)が流れている。円座町(えんざちょう)は、以前は度会郡(わたらいぐん)沼木(ぬまき)村に属していたが、1955年に伊勢市と合併した。

かんこ踊りは円座町だけでなく、三重県では宮川流域の伊勢市小俣町(おぼたちょう)中小俣・下小俣、度会町麻加江(まかえ)や松阪市狹師町など多くの地区で8月の盆の時期などに実施されている(佐八町(そうちちょう)のかんこ踊りについては参考①を参照)。かんこ踊りは羯鼓(かっこ/かんこ)を打ち鳴らしながら踊るので、羯鼓踊と呼ばれている。また、「シャグマ」を頭に被って踊るかんこ踊りは「シャグマ踊り」とも云われる。(シャグマを頭に被らないかんこ踊りもある。)

円座町の羯鼓踊は地区の人々の熱意と努力によって、現在400年近く継承されている。円座町の隣の伊勢市上野町、津村町など(参考①)でも羯鼓踊があったといわれているが、残念ながら、廃(すた)れてしまい現在は行われていない。



②羯鼓踊の練習に励む少年たち

③円座の羯鼓踊(2023年8月16日)
2023年は台風のため8月16日に行われた。例年は8月15日に実施



2 円座の羯鼓踊とその歴史

「円座の羯鼓踊」は三重県伊勢市円座町に伝わる民俗行事で、正覚寺(しょうかくじ)の境内(けいだい)で毎年盆(8月15日の夕刻6時半ごろ)にかがり火(盆供養の送り火(資料1)、資料2)を焚いて行われる。起源(参考②)は江戸時代の慶安(けいあん、1648年~1652年)ごろと言われている。円座町の羯鼓踊は新盆を迎えた精霊(しょうりょう)・先祖の供養(くよう)や五穀豊穡(ごこくほうじょう)そして住民の安穏(あんのん)を祈願する踊りとして、継承されてきた(資料3)。羯鼓を腰に吊るして、肩から白い布で支えて、両手を使い、2本の竹製の桴(ばち)で打ち鳴らして、音頭に合わせて踊る。楽(がく、大太鼓)、鉦(かね、金属製の打楽器の一種)が踊り手にエネルギーを与え、法螺貝(ほらがい)が真夏の夜空に鳴り響く。

円座の羯鼓踊は、太平洋戦争の戦時中には踊り手不足のため、一時途絶え、昭和36年(1961年)まで羯鼓踊は実施されなかった。



④円座町羯鼓踊保存会

円座の羯鼓踊は近隣の他の地区のように廃絶の危機にあった。しかし、(故)森 茂氏(元「円座町羯鼓踊保存会」会長、参考③))を中心に、円座町民は途絶えていたかんこ踊りを復活させるために「円座町羯鼓踊保存会」を昭和37年(1962年)に設立した。「円座町羯鼓踊保存会」はそれ以来、新たな歩みをスタートし、現在に至っている。



⑤森 茂氏

昭和45年(1970年)、大阪府吹田市で行われた日本万国博覧会において、「太陽の塔」がある「お祭り広場」で「日本のまつり」の催し物が6週間にわたって行われた。「円座町羯鼓踊保存会」は8月8日～10日の3日間、羯鼓踊を披露した(公式記録・詳細は資料4に示す)。公式記録(p.172)には、「協会企画の中心の一つであった「日本のまつり」第1部から第6部までには、全国から59の代表的な祭りや民俗芸能が参加した。これだけ多くの各地の芸能が1ヵ所で披露されたのは、初めてのことだった」とある。「日本のまつり」への出演は、「円座町羯鼓踊保存会」としても重要な出来事となった(保存会会員談、参考④)。それまでは年配の会員が大部分であったが、この公演に向けて当時の青年団に属する若い人々の羯鼓踊保存会への参加を促す大きな機会となった。公式記録によると、出演者は63名であった。

平成6年(1994年)には三重県伊勢市で開催された世界祝祭博覧会(まつり博・三重94)に出演した(資料5)。

太平洋戦争前まで、踊り手は世襲制(せしゅうせい)で各戸の長男のみが踊り、音頭(おんど)は門外不出(もんがいふしゅつ)で、町外への流出を避けるため、すべて口伝(くでん)で継承されてきた(資料3)。これは他の地区でも同じで、度会町麻加江では、練習も人里離れた所で行ったと伝えられている(資料6)。

現在、円座の羯鼓踊は「円座町羯鼓踊保存会」によって公演され、円座町出身の男子が参加している。「円座の羯鼓踊」は「佐八(そうち)の羯鼓踊」とともに、1964年10月16日に三重県無形民俗文化財に指定された(資料7)。

円座の羯鼓踊は保存会会員の経験者が若い踊り手を指導している。(以前の指導方法は資料2、8および参考⑤)

3 羯鼓(かっこ⇒かんこ)

羯鼓とも書く。訛(なま)って「かっこ」が「かんこ」となった。雅楽などで使われる打楽器で鼓(つづみ)の一種。奈良時代に中国から伝わった。円座町の羯鼓踊では馬皮を張った羯鼓が使われている。羯鼓は竹製の輪に張った皮を胴の両側に当てて、ひもで締めた締太鼓(しめだいこ)である。円筒状の胴は木の薄板を曲げて作られる曲物(まげもの、曲げわっぱともいう)で、絵や塗装はない。2本の竹製のバチを使い、両手で羯鼓を打ち鳴らす。(参考⑥)



⑥羯鼓

4 円座町の羯鼓踊の踊り手の衣装

白と紺(こん)または白と黒の縦縞(たてじま)模様で筒袖(つつそで、たもとがない筒状の袖)の胴着(参考⑦)を着て、手甲(てっこう、上腕部から手首までを保護するために着用)を着ける(以前は脚絆(きゃはん、脛(すね)の部分に巻く布)も着用していた)。足に地下足袋(じかたび)(参考⑧)を履(は)く。腰に「シモタ」を纏(まと)う。腹に白木綿(しろもめん、晒(さら)し)1反(たん、約11m)を巻く。腰に羯鼓をひもで吊るし、肩からの白い布で羯鼓を支える。最後に頭の真上に「シャグマ」が直立するように、シャグマを頭に被(かぶ)る。(資料2)



⑦胴着を着用



⑧シモタを纏い、白木綿を二人掛かりでしっかり巻く



⑨白木綿(前)



⑩白木綿(後)



⑪羯鼓を吊るす



⑫シャグマを被る

小学生3、4、5年の小さい踊り手(2023年・2024年)はシャグマではなく、花笠を頭に被り、胴着も縦縞模様ではない。

5 シャグマ

頭に白馬の毛(尾毛および鬘(たてがみ))でできたシャグマ(資料9、参考⑨)を被(かぶ)る。シャグマは円筒形に作られて、先端はやや開いている。頭上1尺5寸(約45cm)、頭下2尺5寸(約76cm)、重さ1貫200匁(1かん200もんめ、約3.8kg)で頭上に赤色の絹糸で帯状(幅6寸、約18cm)に巻いてある(資料2)。シャグマを頭に被ると、顔は隠れて見えない。踊るときは、シャグマの上部が真上を向いているように踊る。すなわち、シャグマがずれないように常に頭を下向きにすることなく、踊り続けなければならない。



⑬円座町羯鼓踊保存会所有のシャグマ

現在、円座町羯鼓踊保存会はシャグマ25体を所有している。シャグマは樟脳(しょうのう)で虫除けを施して大事に保管されている。シャグマの新品は現在、作る人もなく手に入らないので破損した箇所は修理している。『小俣町史』は当時シャグマ1体が約田1反分の値打ちがあったと記載している(資料10)。

シャグマは「赤熊(しゃぐま)」とも書かれる(資料11)。

小学生3、4、5年の小さい踊り手はシャグマではなく、花笠を頭に被って踊る(写真⑮⑯)。



⑮花笠



⑯花笠を被った踊り手の少年

⑭シャグマ: 写真は上下が逆。保存時は紙で巻いて、赤色の絹糸で帯状に巻いた部分(白色の紙の内側で見えない)を保護している。上下を逆にして頭に被ると、外側部分が下がり頭全体を覆うように下がる。シャグマはあごで固定する。踊り手は赤色の帯状部分を触らないように注意している。

6 シモタ

菅(すげ)で編んだ腰蓑(みの)(参考⑩)。菅は湿地に生育し高さ1m余りで、現在は伊勢市上野町で採集(写真⑳)。刈り取った菅を水洗いし、1週間位陰干しをする。菅を20~30本をより合わせ、麻ひもを使って、これらを50位集めてシモタを作る。シモタの長さは踊り手の腰からの長さに合わせて編む。シモタを毎年、新調しているが、大変な作業量である。



⑰菅を20~30本をより合わせたもの



⑱さらに麻ひもで集めたもの(長さを揃えて編む)



⑲完成したシモタ

7 円座の羯鼓踊の演者の構成(2023年/2024年)

先頭に高張提灯(たかはりちょうちん、長竿の先に取り付ける)(一対2名/1名)、法螺貝(ほらがい)吹き(4名/3名)、音頭(の歌い手)(5名/6名)(参考⑪)、楽(がく)打ち(1名、楽打ち=大太鼓打ち)、鉦(かね)(1名)、踊り手(21名)。踊り手21名の内、13名/15名(小学6年生以上の若者)はシャグマを被って踊り、8名/6名(小学3~5年生)は花笠を被って踊る。



⑩法螺貝(ほらがい)



⑪鉦(かね)



⑫楽(がく、大太鼓)

8 円座の羯鼓踊の演目と音頭

【構成】

(1)前半…境内で「念仏踊」、本堂で初盆供養の読経(どきょう)が同時進行で行われる。

- ①「いれは(入波)」(入場曲)
- ②「一心きみよ(一心帰命、いっしんきみよう)」(参考⑫)
- ③「かづえ(数え)」(③は念仏踊で、後半の⑨とは異なる)
- ④「をさなご」

①②③④の各踊りの最後は「大踊り」が行われる。「大踊り」では音頭はなく、楽(大太鼓)、鉦が付き、法螺貝が鳴り響く。

念仏踊の「いれは(入波)」は入場曲で、境内を反時計回りに回りながら始まる。「念仏踊」は初盆供養・先祖供養のために行う宗教的な踊りである。踊りごとに、冒頭に「頭打ち(かしらうち)」による独演が入り、それに次いで踊り手全員が羯鼓を2本の竹製の桴(ばち)を使って、両手で打ち鳴らしながら音頭に合わせて踊る(資料1)。

「念仏踊」の音頭には、浄土教系(浄土宗・浄土真宗など)の念仏である「南無阿弥陀仏」(なむあみだぶつ、「阿弥陀如来(あみだによらい)に帰依(きえ)します」の意味)がくずれた「なむまいだぶつ」、「なむまいだ」の歌詞を含む。

②③④のそれぞれの後に、新仏(あらぼとけ)、戦没者、米山家などの地区功労者、三界万霊(さんがいばんれい)などが次々と読み上げられてから、供養の踊りが行われる。



(休憩)「汗入り」と呼ばれる。

(2)後半…「鼓踊」(こおどり、資料3)(資料1、10では「小踊り」と記載)

- ⑤「うぐいす」(⑥の入場曲)
- ⑥「牛若(うしわか)」
- ⑦「父子(ちちご)」(⑧の入場曲)
- ⑧「おちうど(落人)」
- ⑨「(鼓踊(こおどりの)かづえ)」の5演目。

鼓踊は地区の住民の娯楽のために演ずるので、宗教的な内容はない。楽、鉦は

⑬⑭羯鼓踊



無く、羯鼓と法螺貝の音が響き、踊りは躍動的で派手になる。

音頭は元々、長いバージョン(現在は短くしている)もあったので、以前は夜半過ぎまで踊っていたと伝えられている。現在は上記の9演目(資料12および後述の「12 羯鼓踊の音頭」参照)が演じられている。音頭の歌詞はほとんどひらがなで書かれている。前述のように、音頭は門外不出で、すべて口伝(くでん)により承継されてきたため、漢字の使用は限定的であり歌詞の意味が不明な部分もある。そのため、保存会の会員の方は漢字で歌詞を確定しにくいと言っている。(参考⑬)

9 2023年「円座の羯鼓踊」の準備と当日の公演

- ①シモタ刈り:伊勢市上野町において、7月22日(土)早朝に菅(すげ)を刈った。洗浄して、乾燥。
- ②シモタ製作:7月30日午前～
- ③練習:7月27日(木)～8月13日(日)
- ④「道具揃え(ぞろえ)」の日…最終リハーサル:8月14日(月)衣装を着けて前日練習をする予定であったが、台風7号が接近したため、中止。
- ⑤羯鼓踊の当日:8月15日(火)15日に台風7号が紀伊半島に上陸したため、中止。
- ⑥羯鼓踊の披露:8月16日(水)、正式の羯鼓踊は中止となったが、7月末よりずっと練習してきたので、円座町民に披露。
 - かがり火に着火:午後6時すぎ。
 - 羯鼓踊保存会会長と実行委員長が米山家に開始のあいさつ。
 - 前半(念仏踊4演目)と後半(鼓踊(こおどり)5演目)の公演:午後6時半ごろスタート(途中汗入りを含め、数回の休憩をはさんだ)。
 - 午後9時12分終了。



⑫正覚寺境内(2023年8月16日午後)開始前

10 2024年「円座の羯鼓踊」の準備と当日の公演

- ①シモタ刈り:7月20日(土)早朝(午前5時正覚寺集合、11名参加)。伊勢市上野町において菅(すげ)を刈った。刈り取った菅を別のメンバーが円座町墓地の脇を流れる水路で洗浄し、チェックし揃えた。その後、乾燥。
- ②シモタ製作:7月28日(日)午前～



⑬シモタ刈り(7月20日)



⑭菅(すげ)の洗浄、午前7時半

午前5時50分頃)



⑮シモタの採寸
8月1日

- ③練習:7月27日(土)～8月13日(火)(7月30日、8月3日、7日、12日は休み)
- ④「道具揃え(ぞろえ)」の日…最終リハーサル:8月14日(水)夕方から衣装を着けて前日練習。



⑯羯鼓をつけて練習(8月10日)



⑰道具揃えの日(8月14日)晒し(さらし)を巻く



⑱道具揃えの日の練習

⑤8月15日(木)(羯鼓踊の当日): 日中は約35℃(8月に入っても猛暑の日々が続いた)。

●羯鼓踊保存会会長と実行委員長が米山家を訪問し開始のあいさつ: 午後6時前。

●かがり火に着火: 午後6時すぎ。



③②正覚寺境内(2024年8月15日午後)開始前



③③かがり火に着火

●前半(念仏踊4演目): 午後6時40分に入場、午後8時まで。境内で「念仏踊」、正覚寺本堂で初盆供養の読経(どきょう)が同時進行で行われた(初盆供養の方8名)。途中に休憩をはさんだ。

●汗入り: 午後8時~8時30分、前半と後半の間の休憩。

●後半(鼓踊(こおどり)5演目): 午後8時30分~10時10分(途中に休憩をはさんだ)。

●公演終了: 午後10時10分、昨年より終了時間は遅くなった。



③④正覚寺前庭に入場



③⑤羯鼓踊が始まる



③⑥正覚寺本堂で初盆供養



③⑦羯鼓踊: 前半の念仏踊



③⑧羯鼓踊: 後半の鼓踊(こおどり)

11 正覚寺と米山家

正覚寺は紀州藩円座組の大庄屋(おおじょうや、江戸時代の最上位の村役人)であった米山家9代の米山宗持(よねやまむねもち、1790年~1839年)が1811年に開いた曹洞宗(そうとうしゅう)の寺院で、米山家の菩提寺(ぼだいじ、先祖代々の墓がある寺)である。元は度会郡玉城町(わたらいぐんたまきちょう)宮古にある廣泰寺(こうたいじ、曹洞宗)14世大巖和尚が開山して、大智庵と呼ばれたが、1865年に正覚寺と改められた(正覚寺前の解説案内板による)。

米山家4代の米山宗隆(むねたか)と米山宗持は私財を投げうって、円座の住民と共に米山用水(堰溝(ゆみぞ)ともいう)を切り拓いて米山新田を開発した(資料13に詳しく記載)。米山宗持は新田開発のために私財だけでは足りないのを、米山新田を担保にして、借金をしていた。しかし、天保の大飢饉(てんぽうのだいきん)のために借金が返せなくなり、責任を取るために、天保10年1月23日(1839年)に大智庵(後の正覚寺)において切腹して命を絶った。

身命(しんめい)を賭(と)して行った米山新田開発の功績に対して、円座町民は米山家の先祖への敬意と感謝の念を持って羯鼓踊の当日に米山家を訪ねて、開始の挨拶(あいさつ)をする慣習となっている。



⑳米山新田(2024年8月14日)収穫直前

12 羯鼓踊の音頭

「かんこ踊り 音頭」(資料12、表紙とも10ページ、円座町羯鼓踊保存会)を以下に掲載する。
念仏踊の①「いれは(入波)」、②「一心きみよ(一心帰命、いっしんきみよう)」、③「かづえ(数え)」、④「をさなご」の4演目、鼓踊(こおどり)の⑤「うぐいす」、⑥「牛若(うしわか)」、⑦「父子(ちちご)」、⑧「おちうど(落人)」、⑨「(鼓踊(こおどり)の)かづえ」の5演目、計9演目を収録。(円座町羯鼓踊保存会の許可なく転載不可)

かんこ踊り 音頭

かんこ踊り保存会

①
念仏

い
れ
は

なむまいだぶつ なむまいだ
としよりてしよりて
なむまいだぶつ なむまいだ
しいでめいどいうつるとき
なむまいだぶつ なむまいだ
こしいはかづきのゆみをはり
なむまいだぶつ なむまいだ
しでのやまいとたちのぼる
なむまいだぶつ なむまいだ
おーなー

③
念仏

か
づ
え

おだぶつ なあまいだ
ひとつとえ
ひとにじひを しょうづれば
そのみそのまま かみほとけ
なあまいだ
おだぶつ なあまいだ
ふたつとえ
ふたたびかいらぬ めいとなり
なんまいだぶつと
ごしようくだされ
なあまいだ
おーなー

②
念仏

一
心
き
み
よ

いっしんきみよをの みだによらい
なむまいだぶつ なむまいだ
にしあんらく ごせんがん
なむまいだぶつ なむまいだ
さんせんぐぞくの ちぎよをなり
なむまいだぶつ なむまいだ
しそをそわがの とこおいて
なむまいだぶつ なむまいだ
おーなー

うぐいす

うぐいすはうぐいすは
うぐいすはうぐいすは
ことしはじめてはまきんぐ
ことしはじめてはまきんぐ
いちやのやどをよそらえは
いちやのやどをよそらえは
はまのこまつのにのえだに
はまのこまつのにのえだに
しばかきよせてすをくんで
しばかきよせてすをくんで
きりりとまあやれ
きりりとまあやれ
十五夜のつきはあのごとく
あのごとく

念仏

をさなご

とおよりうちの をさなごの
なむまいだぶつ なむまいだ
しいでめいどい うつるとき
なむまいだぶつ なむまいだ
えんまらいおん まいらせて
なむまいだぶつ なむまいだ
とがのしだいを もうそなら
なむまいだぶつ なむまいだ

おーなー

父子(ちちこ)

父子は天下の長者どの
父子は天下の長者どの
母子ははりまの長者どの
母子ははりまの長者どの
一人の長者がめについて
一人の長者がめについて
かまくらのえめしとられ
かまくらのえめしとられ
ひるはしがねのあしだめ
ひるはしがねのあしだめ
よるはしらきの弓をみす
よるはしらきの弓をみす
弓を弓をその弓を
弓を弓をその弓を
あかつきひとえにぬすまれて
あかつきひとえにぬすまれて
よあけてひとにといきれば
よあけてひとにといきれば
きりりとまあやれ
きりりとまあやれ
十五夜の月はあのごとく
あのごとく

ひー やー

牛若(うしわか)

やらうつくしのうしわかどのは
やらうつくしのうしわかどのは
にほんでいちのまわりびと
にほんでいちのまわりびと
にほんでいちのまわりびと
にほんでいちのまわりびと
ななつでくらまえあがりし
ななつでくらまえあがりし
くらまのやまですみをやる
くらまのやまですみをやる
さあー ヒヨージ
さあー ヒヨージ
そばでかみをくときやる
そばでかみをくときやる
五丈のはしえおいてやる
五丈のはしえおいてやる
とるかことりかすわるとりか
とるかことりかすわるとりか
せんにんぎりはやらみごと
せんにんぎりはやらみごと
せんにんぎりはやらみごと
せんにんぎりはやらみごと
さあー ヒヨージ
さあー ヒヨージ
せんにんぎりはやらみごと
せんにんぎりはやらみごと
うしわかおどりはこれまでよ
うしわかおどりはこれまでよ
ああこれまでよ
ああこれまでよ

さー あー

おちうど

おちうどのすつてんずくりをみてやれば
おちうどのすつてんずくりをみてやれば
おもてはしらは六十六本
おもてはしらは六十六本
たるぎぐちにはかねおぼして
たるぎぐちにはかねおぼして
そらにはひはだのうしぶき
そらにはひはだのうしぶき
そらにはひはだのうしぶき
そらにはひはだのうしぶき
さー あー ヒヨージ
さー あー ヒヨージ
そらにはひはだのうしぶき
そらにはひはだのうしぶき
十三姫子はたちやいちでとちらやござる
十三姫子はたちやいちでとちらやござる
とのごはいやどにござるとままよ
とのごはいやどにござるとままよ
わいらはいそいできぎござる
わいらはいそいできぎござる
よしなやああやをおりましよう
よしなやああやをおりましよう
さー あー ヒヨージ
さー あー ヒヨージ
とのごはやぐらでつつみうつ
とのごはやぐらでつつみうつ
とのごのつつみのねのよきよきよ
とのごのつつみのねのよきよきよ
きよみづおてらのぎすのこえ
きよみづおてらのぎすのこえ
きよみづおてらのきよみづてらの
きよみづおてらのきよみづてらの
松のおかぜはみにしゆまねども
松のおかぜはみにしゆまねども
さわまつおかせはみにしゆんだ
さわまつおかせはみにしゆんだ
よしなやああやをおりましよう
よしなやああやをおりましよう
さー あー ヒヨージ
さー あー ヒヨージ
さわまつおかせはみにしゆんだ
さわまつおかせはみにしゆんだ
このよのいややをいつまでおどる
このよのいややをいつまでおどる
おどるわかいしゆばあをたて
おどるわかいしゆばあをたて
おどるわかいしゆばあをたて
おどるわかいしゆばあをたて
さー あー
さー あー

かすえ

ひとりまるねはしよけれど
ひとりまるねはしよけれど
ござらぬのごとねてかたる
ござらぬのごとねてかたる
ふたりよにんのなかにねて
ふたりよにんのなかにねて
おもいしこじよるとねてかたる
おもいしこじよるとねてかたる
みこんでふみはやらすまい
みこんでふみはやらすまい
なせそれそのよみをやつす
なせそれそのよみをやつす
よなかにきみがかようなら
よなかにきみがかようなら
たもとにたまぐさたやすまい
たもとにたまぐさたやすまい
さー あー ヒヨージ
さー あー ヒヨージ

いつよりきよのひははやくれた
いつよりきよのひははやくれた
めめよせこじよるとねてかたる
めめよせこじよるとねてかたる
むせきのうちのこがねじよる
むせきのうちのこがねじよる
えんのしたでまいをする
えんのしたでまいをする
なんぎするぞえつまゆえに
なんぎするぞえつまゆえに
つまつまゆえにいなぎのこそろたち
つまつまゆえにいなぎのこそろたち
やらぎやまのなんぎをば
やらぎやまのなんぎをば
おもひしことをかいてやる
おもひしことをかいてやる
さー あー ヒヨージ
さー あー ヒヨージ

参考

- 参考①:「佐八(そうち)の羯鼓踊」は「円座の羯鼓踊」とともに1964年、三重県無形民俗文化財に指定された。佐八の羯鼓踊は8月15日、16日の両日に長泉寺(曹洞宗)に面する佐八町公民館の前庭で行われてきた。しかし、新型コロナウイルス感染症による公演自粛および指導者・踊り手不足のため、ここ数年、残念ながら羯鼓踊は実施されていない(2024年も行われていない)。早期の再開が強く望まれる。資料8の注2によると、伊勢市津村町では昭和36年(1961年)までかんこ踊りが行われたと記載されている。(以下、矢持町在住の中瀬誠一氏談)矢持町の(旧)菖蒲村では、かんこ踊りを二十日(はつか)盆として、8月20日に行っていたが、明治の中頃に途絶えた。また、(旧)床ノ木(いすのき)村では、かんこ踊りを昭和30年頃まで行っていた。
- 参考②:資料8では「一説には天正年間(1573年～1592年)ともいわれる。」との記載があるが、文献は示されていない。
外来起源説:羯鼓踊は頭にシャグマを被り、腰に腰蓑を着けた姿から、南洋などの「外来説」があるが、根拠は全くない(資料11)。高田派専修寺(せんしゅうじ、三重県津市一身田町)の大念仏起源説:浄土真宗の一派である真宗高田派専修寺の布教の影響と関係があると指摘されている(資料11)。
- 参考③:(故)森 茂氏:「円座の羯鼓踊」の復興保存の功労者である。伊勢市円座町にある株式会社森組の元社長。
- 参考④:円座の羯鼓踊の万国博出演は円座町羯鼓踊保存会に大きなインパクトを与えたが、これは円座町羯鼓踊保存会だけに限ったものではなかった。「一九七〇年の「お祭り」—日本万国博覧会における祭りの表象—」(俵木(ひょうき) 悟、『日本常民文化紀要』、p.93-139、2021年3月)に、「その後の調査経験の中で、同様に万国博の出演を、今も自分たちの来歴中の最重要の出来事として語る民俗芸能と多く出会うことになった」(p.96)と記載。
- 参考⑤:羯鼓踊の指導者:以前は(資料2、10)、指導者として大老(たいろう、50歳以上)、中老(ちゅうろう、45歳以上、資料6では40歳以上)が置かれ、伝統の保存と後継者の育成が行われていた。現在はその仕組みはない。
- 参考⑥:壊れた羯鼓の修理:最近、愛知県岡崎市の三浦太鼓店で行われた。
- 参考⑦:胴着の色:資料2、3では白黒となっている。2023年の羯鼓踊では、13名中1名だけが白黒、12名が白紺の縦縞模様であった。
- 参考⑧:履物(はきもの):元々、大人は黒足袋、こどもは白足袋に草鞋(わらじ)を履いていた。資料2、3では草履(ぞうり)となっている。2023年では踊り手は全員白または黒の地下足袋を履いていた。
- 参考⑨:シャグマ(赤熊):「やすい花(ばな)」は京都洛北の4地区で伝承されている春の民俗行事である(資料9)。「シャグマ」と呼ばれる赤毛または黒毛の被り物を頭に被り、鬼たちに扮して、手に太鼓または鉦(かね)を持って、桴(ばち)でたたきながら激しく踊る(円座の羯鼓踊との類似性が見られる)。「やすい花(やすい祭りとも云われる)」での踊りは「やすい踊」と呼ばれ、平安時代に起源があると伝えられている。平安時代後期に京都では疫病(えきびょう)が蔓延(まんえん)した。「やすい花」は疫病退散・無病息災を祈願する行事である。「やすい花」は鞍馬(くらま)の火祭、太秦(うずまさ)の牛祭ともに、京都三奇祭の一つで、国の無形民俗文化財に指定されている。
- 参考⑩:菅の採集:以前は度会町下久具(わたらいちょうしもくぐ)や玉城町田丸(たまきちょうたまる)の田丸城の近くで採集していたが、2023年、2024年は7月下旬に伊勢市上野町の旧ノリタケ伊勢電子工業株式会社の近くで刈り取った。
- 参考⑪:音頭(おんど):多く的人数で歌にしたがって踊るための歌やその踊り。
- 参考⑫:帰命:南無の漢訳で、「命を捧げて従う」の意味。
- 参考⑬:念仏踊の「かつえ(数え)」は数え歌で、「ひとつとえ」、「ふたつとえ」の歌詞を含む。「牛若(うしわか)」は歌詞に鞍馬の山、五条大橋が出ているので、牛若丸のことであろう。「(こおどりの)かづえ」も数え歌である。歌詞の各文の最初がひとり、ふたり、み、よ、いつ、む、な、やで始まる。

参考資料

- 「円座の羯鼓踊」、『平成18年度(2007年3月) ふるさと文化復興事業 松阪伊勢地域伝統文化伝承事業』、(企画:松阪伊勢地域伝統文化伝承事業実行委員会、三重県教育委員会、制作:株式会社CNインターボイス)。一般鑑賞編、DVD(2つのDVDファイル、計27分43秒)および解説リーフレット12ページ(佐八(そうち)の羯鼓踊を含む)から成る。漢字は「羯鼓踊」ではなく、「羯鼓踊」が使われた。
- 伊勢市円座町羯鼓踊保存会「三重県無形文化財 羯鼓踊」、見開き2ページ、年度不明、(伊勢市観光商工課)。「円座の羯鼓踊」は「佐八(そうち)の羯鼓踊」と同時に三重県無形民俗文化財に昭和39年(1964年)10月16日に指定されたのでこれ以降に作成されたと考えられる。漢字の「羯」の代わりに羊偏(ひつじへん)と羯の旁(つくり)が使われた。かがり火を「タイマツ」(松明)と記載しているが、現在はその呼び名はない。
- 坂本昌美「羯鼓踊」、2012年、(円座町羯鼓踊保存会)。平成24年度円座町羯鼓踊保存会会長による解説、A4で1ページのみ。

- 4) 日本万国博覧会記念協会 「催し物」、『日本万国博覧会公式記録 第2巻』、お祭り広場、p.184、1972年。「日本のまつり(5)、8月8～10日 19:00、伊勢市円座羯鼓(かっこ)踊保存会63人、第9場「かっこ踊」(三重)」と記載。「日本のまつり」は全6回(6週間)行われ、円座の羯鼓踊は5回目(1970年8月8日～10日、3日間、19:00～21:00)の「第9場」で披露された。5回目は全体で10グループが参加し、第1場「祇園祭(京都)」など。参考:記録によると、8月8日(土)の入場者数は427,725人。
- 5) 財団法人 世界祝祭博覧会協会 「記録編 催事」、『世界祝祭博覧会 まつり博'94公式記録』、p.278-279、平成7年(1995年)3月。1994年8月28日(日)に、スペシャルイベント「三重のまつり『かっこ踊り』」が開催された。「円座のかっこ踊り、出演団体 円座町羯鼓踊保存会、出演者外(ほか) 63人、公演回数 サンアリーナ1回」と記載。他に、松阪市狛師町、亀山市阿野町のかっこ踊りが披露された。また、三重県の市町村デーの行事で三重県の6市町村(当時の度会郡小俣町を含む)のかっこ踊りが披露された。
- 6) 「麻加江かっこ踊り」、『平成18年度 ふるさと文化復興事業 松阪伊勢地域伝統文化伝承事業』、(企画:松阪伊勢地域伝統文化伝承事業実行委員会、三重県教育委員会)。DVD(3つのDVDファイル、計44分25秒)および解説リーフレット6ページから成る。麻加江のかっこ踊りは毎年8月15日に慶林寺(けいりんじ、曹洞宗)で行われている。演目は、順に「大名行列」(明治以降)、「入り場付(いりばつけ)」(踊りの最初の入端(いりは)の曲)、「場付(ばつけ)」、「御所踊り」、「敷(しき)あや(かっこあや)」、「念仏踊り」、「綾(あや)踊り」から成る。音頭は「出し」と「受け」の二手に分かれて掛け合いで唄う。念仏踊りは初盆供養、先祖供養および戦没者の霊、三界万霊のための踊りである。念仏踊りでは、輪の中央でシャグマを被った踊り手が太鼓を打つ。また鉦も加わる。他の踊りは地区住民の楽しみのための踊りである。綾踊りでは綾子(あやこ)と呼ばれる少女(幼稚園児から小学生)とシャグマを被った踊り手4名が参加。麻加江では シャグマは10体あり、個人で保管している。
- 7) 「文化財—円座の羯鼓踊」、『三重の文化』、文化財データベース、(三重県)、<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp>、(参照2023-10-21)
- 8) 伊勢市編 「6円座の羯鼓踊」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第9章 民俗文化財、第1節 民族行事、p.532、平成19年、(伊勢市)。注3に「復興保存の功労者の故・森 茂氏(元円座町羯鼓踊保存会会長)」の記載がある。
- 9) 「京都をつなぐ無形文化遺産—やすらい花—」、『京都の歴史と文化 映像ライブラリー』、15分15秒、2019、(京都市文化観光資源保護財団)。
- 10) 小俣町編 「第二項 かっこ踊り」、『小俣町史 通史編』、第十一節 芸能、p.894、昭和63年、(小俣町)。小俣町下小俣のかっこ踊りは慶蔵院(浄土宗)の境内で毎年8月15日に行われている。練習は下小俣公民館の前庭で実施。(2024年8月11日、練習を見学させていただいた時):腰蓑(シモタ)は毎年、新調していない。小学生の女子が花笠踊りに参加していたが、2024年では希望者がいなくて花笠踊りは実施できなかった。残念!また、下小俣のかっこ踊りについて、前島住職にお話を伺っていたとき、小俣町の共敬では白色のシャグマだけでなく、一部、黒色のシャグマもあったという興味深い話を聞いた。
- 11) 五来 重 『踊り念仏』、平凡社ライブラリー241、1998年、(平凡社)。五来重(ごらいしげる)は仏教民俗学者。かっこ踊りについて詳しい説明がある(p.185-198)。かっこ踊りは京都の「やすらい花」(参考⑨)の系譜をひくと説明している。
- 12) 『かっこ踊り 音頭』、表紙とも10ページ、年度不明、(円座町羯鼓踊保存会)。
- 13) 沼木まちづくり協議会 「米山新田と米山用水(堰溝)」、p.1-9、2024年、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>
- 14) 「かっこ踊り」、『盆踊りの世界』、<https://www.bonodori.net/kanko>、(参照2023-10-22)。三重県南部の伊勢・志摩地方の念仏踊りと北部の伊賀地方の雨乞踊りに分類している。歴史などの説明もある。
- 15) 伊勢市円座町羯鼓踊保存会 「かっこ踊り」、絵葉書8枚セット、年度不明。絵葉書の収益金は円座町羯鼓踊保存会の維持、運営費および保存会館建設資金の一部に充当すると記載されている。
- 16) 中西智子 「かっこ踊りの研究(Ⅰ)—かっこ踊りの文化的背景—」、『三重大学教育学部研究紀要』、教育科学、第52巻、p.149-157、2001年。三重県および三重県外のかっこ踊りの学術的な考察が記載されている。

謝辞

円座町羯鼓踊保存会会員の方々の協力および資料の提供を受けて、解説を作成しました。会員の方々に羯鼓踊の演目構成などの説明、校正をしていただきました。保存会および保存会会員の方々に深く感謝いたします。また、長年に渡って熱意と努力により「円座の羯鼓踊」を継承している円座町民の方々に敬意を表します。

作成責任者:沼木まちづくり協議会 立花和也

初版2024年1月13日 第2版(改訂増補)2024年12月12日

沼木まちづくり協議会

住所:〒516-1104 三重県伊勢市上野町823 (旧沼木中学校)

TEL:0596-39-7240 FAX:0596-39-7241 メールアドレス:info@numakijin.com ホームページ:<https://numakijin.com>